

令和4年度フェロー認定（13名）

氏名	江村 克己
認定時の所属	日本電気株式会社
抱負	<p>社会が求める価値が機能的価値から意味的価値へ変化し、新しい価値創造が求められるようになってきました。世の中の不確実性が増大してグローバルに解くべき課題も顕在化しています。これからは分野横断的な取組みが不可欠です。広く領域間連合を進めることで、新しいイノベーションの実現が可能になります。多くの学協会の連合体である日本工学会が果たすべき役割は、ますます大きくなっていると考えます。日本工学会の活動を工学の枠を超えてさらに広げることで、より大きな価値提供が可能になります。日本工学会としてのチャレンジに微力ながらも貢献し、新たな展開に寄与していきたいと思っています。</p>
氏名	香川 澄
認定時の所属	防衛大学校
抱負	<p>学会活動等の国内外における研究活動や学術的な委員会活動によって得ました学識、知見をもとに日本や東南アジアをはじめとする世界の工学の発展に貢献したいと思っております。近年は循環型社会、SDGsの構築、カーボンニュートラル社会の実現が国際的な目標となっていますので、今まで研究開発してきた再生可能エネルギー関連の工学分野、特に冷凍空調に関連する分野でこの実現に向けて尽力いたします。また、冷凍空調分野での活動を通じて日本の海外への発信力を増していくことが大切だと感じています。その中で、カーボンニュートラルに関しては再生可能エネルギーの蓄熱を含む新冷凍空調技術やスターリングエンジン・バイオマス発電など国・地域におけるシステム構成提案なども行ってきましたので、これらの経験を御学会の活動にお役に立てて行きたいと思っております。</p>
氏名	川田 宏之
認定時の所属	早稲田大学
抱負	<p>これまで日本が世界をリードしてきたモノづくりの根幹が揺るぎつつある現代において、世界では新たな問題が山積し始めている。新型コロナウイルスと共存する社会の実現、カーボンニュートラルの達成条件とその方策、新たな高等教育理念の創出とその実現などである。このような背景の中、世界経済の牽引車として貢献してきた工学の果たす役割は大きい。</p> <p>とくに、それを束ね95学協会の代表組織である日本工学会は産業構造の在り方に影響を及ぼす団体であり、今後の日本の産業の発展を担う重要な役割を担っていると考えている。小職は長らく「機械工学とは人を幸せにする学問」であるとの信念をもって研究・教育を担当してきた。これからは機械工学の枠組みに捕らわれずに、さらに大きな枠組みとしての工学を前提とした議論を行いたいと考えている。問題の大きさゆえに期間中に十分な方向性を見出せるまでに行かないが、今後の日本の方向性を見据え、これまでに得た知見や人脈をもとの日本工学の発展に尽力したいと考えている。</p>
氏名	小池 俊雄
認定時の所属	土木研究所
抱負	<p>科学の分化と系統化が進み、関連するデータや情報の多様性と量が爆発的に増大しているために、部分システムにおける科学の知は集積されても、それらが全体システムに反映されない、あるいは全体システムや他の部分システムの影響を当該部分システムに取り込めないために、分化した分野間にまたがる社会的問題の本質的な解決につながらないという事態となっています。科学が社会的問題の解決に寄与しつつ、科学そのものとしても持続的発展を遂げるために、現象の認識とともに現象の創出や改善を目的とする知識活動と、社会的問題を解決するための課題を科学的手法により発見するという学術分野の総体である工学の果たす役割は大きく、その発展に些かとも貢献できれば幸いです。</p>

氏名	斉藤 史郎
認定時の所属	株式会社東芝
抱負	<p>会社での研究開発を中心とした実務活動、管理者や執行役としてのマネジメントや経営経験、電気学会の会長、さらには各種協会（産業全体、量子技術、バイオ、半導体、ファインセラミクス、光産業など）の理事の経験やそれらで得られた人脈なども活かし、日本の工学分野の発展に寄与したい。</p>
氏名	阪田 史郎
認定時の所属	東京大学
抱負	<p>工学の価値は、技術開発を通して人類、社会全体の幸福に貢献することであり、今後も社会に対する役割、使命はますます大きなものになると考えます。一方で、工学を取り巻く環境は、時代とともに大きく変化しています。このような現在の日本工学会の置かれた状況を踏まえ、情報技術の研究開発、教育に長年携わってきた一工学者として、以下の面から、日本工学会の発展に貢献したいと思えます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際的な研究活動の活発化 国際間での学会やシンポジウムの共催だけでなく、さらなる研究者、技術者の交流や共同研究開発を含めた、より密で相乗効果を生出す国際間協力を推進し、グローバルな視点から学会活動の活性化を支援します。 2. 学際的活動の活発化 近年は、これまで比較的個別に発展してきた個々の工学分野の間で、各分野の利点や特質を併せ持った学際的な研究開発の重要性が高まっています。人工知能（AI）やIoT（Internet of Things）などの進展により、様々な工学分野において情報技術の活用も進展しています。このような事例も含め、分野間の連携によって相乗効果を生出しうる研究テーマの発掘を先見性を持って進め、研究活動を支援します。 3. アントレプレナーシップの醸成 産業界においては、かつては大企業が主に研究開発を推進する傾向がありました。が、その後の様々な技術の進展も相まって、小規模ながら傑出した革新的アイデアや研究開発力、技術をもった起業家によるベンチャーが工学分野を牽引する例が多くなっています。日本工学会においても、このような優れた起業家を育成して工学分野全体の発展、活性化に導く仕組みの構築を支援します。 4. 社会課題解決に向けた技術開発 世界的な開発目標のSDG's（Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標））をはじめ、カーボンニュートラル、気候変動のような環境問題、社会的包摂など様々な社会課題の解決に資する、日本工学会としての方策立案、その実行を支援します。 5. コロナ禍／コロナ後の工学発展 2019年以降の新型コロナウイルスの猛威により、リモートワークやオンライン授業が、企業や大学において一般的になっています。工学分野においても、研究、教育のあり方が問われるようになっていきます。これまで経験のない社会やライフ・ワーク環境においても、持続的に工学が発展していくための新たなアイデアの創出、アイデアに基づく技術開発の支援を行います。
氏名	阪部 周二
認定時の所属	京都大学
抱負	<p>科学技術立国を標榜する我が国において、科学と技術の発展を支援する自然科学、技術工学系の学会の活動は重要であり、それらの学会相互の連携と協力により我が国の科学技術の一層の発展が期待される。相互連携と情報交流を牽引する日本工学会の使命は極めて重要である。私は大学現職時代に最大8の学会に、現在は3の学会に所属し、加えて、研究助成をする財団（公益法人）、光関連の学協会を支援する財団の役員を務めており、これらの活動から現在の学協会や我が国の学術分野の抱える課題を理解しています。これらの課題を精査、咀嚼することにより、日本工学会の事業活動については我が国の科学技術発展に微力ですが貢献したいと考えております。</p>
氏名	佐藤 徹
認定時の所属	東京大学
抱負	<p>日本の科学技術の発展のため、機会が与えられれば積極的に所信を発信する。また、日本工学会発展のため、日本工学会が企画・主催する各種事業に積極的に参加する。</p>

氏名	塚原 健一
認定時の所属	九州大学
抱負	小職は1985年に建設省に奉職以降、26年にわたり官庁土木技術者として、国内外の社会資本整備に関する政策立案及び事業実施に携わってきた。また、これらの経験を基に、2011年より九州大学において社会資本整備に関する教育研究に従事している。最近15年間は、世界水フォーラム、国際科学会議（ISC）災害リスク統合研究等の国際活動に土木技術者の立場から参画し、また世界工学団体連盟においては日本代表委員として諸活動を行っている。日本工学会においては、実務、学術、国際協力に従事した経験を活用して、日本の工学技術のSDGs達成への貢献の推進に努めて参りたい。
氏名	土橋 律
認定時の所属	東京大学
抱負	近年、SDGs、カーボンニュートラル、Society5.0などに向けた変革が急激に現実的に動き出しており、多くの期待が工学に寄せられています。このような変化に伴う課題には、新たな複合課題も多く、単一の工学分野だけでは解決が困難で、多くの工学分野が連携して初めて解決できるものと思います。そのため、日本の工学系学会のハブである日本工学会の活動の重要性はさらに高まっていくと考えられます。私は、火災安全工学および安全工学が専門ですが、上述の課題を遂行し社会実装してゆく上では、火災や安全に関するリスクへの対応が不可欠なものも多いと考えています。日本工学会のフェローに選定いただいた際には、火災安全工学・安全工学の専門家あるいは橋渡し役として日本工学会の活動に貢献していきたいと考えています。
氏名	藤井 孝蔵
認定時の所属	東京理科大学
抱負	日本工学会の会員となっているいくつかの学会に所属し、これまで研究活動を進めてきました。この10年ほど、各学会での活動も関連分野の研究も社会との関わり合いの重要性が認識されつつあります。その結果、個別学会を超えた活動への要求が必然的に増加しています。広く工学や工業の進歩発展を図ることを目的とする日本工学会においては、こういった横断的な活動の促進、そして社会課題で重要となるトランスサイエンスに関する議論などに関して微力ながらお手伝いができればと考えております。
氏名	森口 祐一
認定時の所属	国立環境研究所
抱負	東日本大震災を契機に、災害関係の学協会との学際的な連携強化の必要性を痛感し、防災学術連携体の設立に関わりました。日本学術会議連携会員として、20の学協会との共催による環境工学連合講演会を担当する小委員会の委員長を務めています。こうした学協会連携の実践の経験、土木工学に源流をもつ環境工学に基礎を置きながら、エネルギー、資源、廃棄物など多岐にわたる環境関連の工学、さらには経済学、化学、地球惑星科学など工学以外の環境関連の諸学との学際的な研究に携わってきた経験、および研究・教育のみならず環境行政や国際機関の活動にも従事した経験をもとに、問題解決のための実学たる工学の発展と工学諸分野のさらなる連携に微力を尽くしたいと思います。

氏名	八嶋 厚
認定時の所属	岐阜大学
抱負	<p>これまで、国民の生命と財産を地震や豪雨などから守るための、「地盤防災」と「インフラの維持管理」に関する幅広い範囲の先端的研究を行ってきた。つまり、地盤防災事業の最上流である、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 地盤の安定性評価のための点検・計測・診断技術の開発、に始まり、 2) さまざまな外力環境(地震、豪雨や人工改変)による地盤挙動の詳細解析、 3) 地盤挙動に基づいた各種防災対策の開発、 4) 各種施工法の提案、さらには、 5) 既設社会資本の点検・診断・維持補修技術の提案 <p>といった、事業の最下流のインフラの維持管理に至るまでの一連のステップにおいて、学内外の多くの研究者を統率する研究プロジェクトリーダーとして、数多くの技術革新に寄与してきた。しかしながら、得られた成果の多くは、開発した各種要素技術を、既存のものに「加えて」いくものであった。自然の外力を工学の技術で抗おうとすると、構築された構造物は、将来にわたって丁寧な維持管理が求められる。これは、果たして正しい方向なのだろうかという疑問を常に持っている。日頃より抱いているこのような科学と工学に関する所感について、日本工学会の皆様との意見交換によりブラッシュアップを図り、日本の工学分野の垣根を越えた技術者の融合とこれから向かうべき方向性探索の一助になればと思います。</p>